人権の名のもとに「幼児期の性教育」は何を語っているのか
――幼児教育における「母親モデル」の問題――

小　泉　友　則

論文要旨

今日の日本では、性教育が「人権」と強く関連する営みであるということは言われて久しいものである。それは、「幼児期の性教育」という領域をめぐっても同様である。しかし、日本における幼児期の性教育をめぐる議論には、「人権」という観点から見れば問題のある表現が散見される。本論では、日本における性教育雑誌である『季刊　セクシュアリティ』『性と生の教育』『Human Sexuality』の分析を通じて、その問題の具体性を明らかにする。分析対象とする時期は、1990 年から 2019 年までとする。その結果、日本における幼児期の性教育をめぐる議論には、「教育者の母親（女性）モデル」という問題があることが明らかとなる。「教育者の母親（女性）モデル」とは、慣習的あるいは「無意識」的に性別役割分業観や近代的な家族観を表出してしまうという、記号的表現のことである。

はじめに――幼児期の性教育とは・問題関心

性教育論において、幼児期（基本的には 3 ～ 5 歳）[1] から性教育が必要であるとする主張は言われて久しいものである。幼児期の性教育の歴史は遡れば今から 100 年以上も前からある [2]。幼児期の性教育の議論においては、幼児の性的好奇心や性に関する質問（例えば、私はどこから生まれたの？）に親はどう対応すべきか、性器の洗い方を教える方法について、性犯罪から幼児を守るにはどうすればよいか、幼児期からジェンダーバイアスを植えつけないためにはどうすればよいか、などのトピックがよく見られる。

そして、性教育が「人権」に関わる教育であるということも、日本では少なくともここ 30 年以上は言われ続けている [3]。近年は特に、性教育が子どもの人権を保障するために必要不可欠であることが『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』*International Technical Guidance on Sexuality Education* の発刊とその改訂（発刊 2009 年、改訂 2018 年）の影響

もあり、国内外で強く主張されている[4)]。『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』においても幼いころからの性教育は子どもの人権を保障する一つの手立てとして重要視されている。

こうした動きと関連して、近年の日本では、幼児期からの性教育の必要性を啓発する書籍の発刊が多数なされている。ただし、それらを見ると、人権という観点からは違和感を覚える記述が散見されることがある。特に違和感を覚えるのが、幼児の性教育の主たる担い手として、母親（女性）を想定している書籍が多いことである。例えば、『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の流れを意識した、幼児期からの性教育を説く書籍のタイトルは『お母さん！学校では防犯も SEX も避妊も教えてくれませんよ！』（のじまなみ著、辰巳出版、2018 年）となっている。タイトルからわかるように、この書籍では、母親が幼児の性教育を行う主体として明示されているのである。そのほかにも、近年の幼児期からの性教育を推進する書籍では、挿絵やマンガ表現を用いながら、母（女性）が子どもに性教育を行う姿を適切な性教育の例として示すものが複数ある[5)]。その際、父（男性）が子どもに性教育を行う場面が描かれるのは、皆無であるか極めて少ないのが特徴的である。幼児を教育する主体を母親として描いてしまうと、それは性別役割分業観（「女は家庭／男は仕事」のような近代的な役割観）の発露に過ぎず、「人権」という観点からは相性が悪いはずである。これら書籍では、そうした観点はあまり考慮されていない。

片や、幼児期の性教育を推進しようとする書籍の中には、その点に自覚的なものもある。幼児の性教育を行う主体が女性に偏らないように、父親にも教育を行うようにと呼びかけるものもある[6)]。

こうした二つの動向を見ると、幼児期の性教育というのは、どのように議論が整理され実施されていっているのかが不明瞭であるように見受けられてくる。この疑問をもとに幼児期の性教育に関する先行研究をたどってみると、幼児期の性教育に関する研究自体が、それ以降の年齢の子どもに関する性教育研究と比べれば少ないという事実が見えてくる。つまり、幼児期の性教育は、性教育推進者にとって重要視され、それを行うべきだとされているのにもかかわらず、研究としてはあまり進んでいない領域であるのだ。そのため、これまで幼児期の性教育をめぐって、何が語られてきており、推進者の間でどのような議論があったのかということがあまり見えない状況なのである。それゆえであるのか、幼児期の性教育に関する理論と言えるようなものが、現代の推進者の間で共有された上で性教育論が展開されているようにも見えない。上記のような幼児期の性教育書籍の間で見られる立場の違いなどはこうしたことが影響しているのではなかろうか。

そこで本論では、幼児期の性教育に関する基礎研究として、これまでの日本において、幼児期の性教育をめぐって、その推進者たちが人権の名のもとに何を語ってきたのかを整理する。調査対象時期は性教育が日本において明確に人権と関連のある教育だと主張され始めた1990年代から、2019年までを調査対象とする。調査対象とする媒体は、定期刊行されており、日本全国の性教育推進者の議論が掲載されている『季刊　セクシュアリティ』（2001~現在まで）とその前身である『性と生の教育』（1996~2000年）、『Human Sexuality』（1990~1995年）とした。本論は、これら媒体のなかで、幼児期の性教育として何をすべきとしてきたのか、どのような議論があったのか、そしてそれら記事から見える問題点を整理し記述していくことを目的とする。本論で行う整理により、幼児期の性教育、さらに広く性教育そのものの課題についても見えていくことだろう。

1　先行研究の整理

性教育を総論的にとりあげる研究では、小学校段階以降の性教育から言及対象となることが一般的である。例えば、田代美江子の「性教育」という、現代における性教育実践・研究を整理する総論的論文がある。ここにおいて、現代における性教育の実践のありようや課題、研究内容が振り返られるとき、小学校段階以降のそれらが言及の対象となっており、それより前である幼児期の性教育に関しては基本的に焦点が当てられていない。幼児期の性教育にやや関連する言及もあるが、それは「家庭」の性教育に関する研究を振り返る際に示唆的に述べられているのみである（「家庭の性教育」と言われるとき、その教育対象とされる子どもは、一般的に幼児～中学児童までの世代の揺れがある）[7]。そのほか、現代における性教育の動向について述べる総論的な著作は数多いが、田代の論文と同様、幼児期の性教育については基本的には触れられない傾向にある。

しかし、豊富とまでは言えないが、幼児期の性教育に関する先行研究のある分野はある。それはまず、幼児教育学領域である。まず、幼児期の性教育に関する議論の整理を試みる本論と最も近い立場として、池田政子の研究が挙げられる。池田は、1955年から1988年までの幼児対象の性教育絵本を調査対象とし、そこに何が書かれているのかを整理している[8]。ただし当然、池田の研究は、1988年までに出版された絵本を対象としたものであるため、それ以降の、現代における幼児期の性教育に関する情報をまとめたものではない。そのほか、幼児教育学領域においては、幼児期の性教育に関する実践報告研究などがしばしばなされている[9]。とはいえ、池田のように、過去の議論や主張のありようを整理するような研究はそ

れ以降なされていない。

また、幼児教育学領域における性教育研究と関連があるものとして、「ジェンダーフリー保育」研究が挙げられる。1990 年代後半以降のジェンダーフリー教育研究の隆盛以降、幼児教育領域においてもジェンダー・フリー教育（保育）を実践しようとする動向が生まれた（以下、ジェンダーフリー保育とする）。ジェンダーフリー保育は、園の中で見られる子どもの性規範や、保育者らの持つ性規範を反省的に見直すための諸実践などを提示し、性差別を解消させることを目的とするものである。ジェンダーフリー保育研究では基本的に、ジェンダーフリー保育の意義の説明や、具体的な実践報告が展開される[10]。また、ジェンダーフリー保育研究との関連で、保育士・幼稚園教師の性別役割分業観に関する調査研究も実施されている[11]。ジェンダーフリー保育で紹介されている実践内容は、同時期やそれより前に見られる幼児期の「性教育」として紹介されている実践内容が同じか、もしくは類似性があるため、ジェンダーフリー保育は性教育と重なる存在として位置づいている。

以上の幼児教育学領域における性教育研究では、性教育の実践研究や、園の関係者（職員・保護者）の性教育に対する意識の統計・質的調査研究にその研究動向が偏っている。そしてその研究の範囲も、個々の園を対象とした個別的研究が占め、幼児期の性教育というトピック全体において何が語られており、どのような実践があったのかについて俯瞰的に見る研究は近年においてはない。

そして、看護学領域においても幼児期の性教育研究は行われている。看護学領域では、幼児の親の性教育に対する意識調査や、家庭や幼稚園での性教育の実態を調査した研究などが実施されている[12]。看護学領域における性教育研究の中で、本論と関連が最もある研究としては森本眞寿代らの研究が挙げられる[13]。森本らの研究では、家庭において父親が性教育に関与する割合は１割～２割程度に見積もれるほど少ないことが明らかにされた。森本らの研究では、主に小～中学校段階の子どもを持つ家庭を言及対象としており、その世代未満の幼児に言及があることは少ない。とはいえ、幼児のような低年齢層を含めた家庭の性教育において、その性教育の実践者として母親ばかりが行なっているという情報は、のちに続く本論の研究成果のひとつとして関連のあることであるためここに記しておきたい。

さて、幼児期の性教育をめぐる先行研究の動向は次のようにまとめられる。まず、総論的な性教育研究においては、幼児期の性教育が研究対象になることは稀であり、幼児期の性教育研究というのはもっぱら幼児教育学領域や看護学領域の中で行われているということである。そして、幼児教育学領域や看護学領域においては、幼児期の性教育に関連する研究は多く場合、個々の園における実践報告研究か、園の保育者や親の性別役割分業観・性教育観に

関する統計・質的調査で占められている。そのため、幼児期の性教育研究には現状、幼児期の性教育というトピックをめぐって現代まで何が語られてきているのかという、これまでの教育論や研究のありようを俯瞰し整理するものはほとんどない。これでは、個々の研究や実践、教育的主張が独立としてあるだけであり、幼児期の性教育を適切に行うためにはどうすればよいのかなどの議論の継承や、過去の実践や研究の反省などをする契機が持てないままである。

2　研究方法と調査対象雑誌の性格――幼児期の性教育に関する記事の特定作業

2－1　研究方法と調査対象雑誌

上記の先行研究の問題を解消する第一歩として、本論文では、幼児期の性教育をめぐってその推進者たちが何を語ってきたのかを明らかにする。推進者たちの議論を拾うための史料として、本論では " 人間と性 " 教育研究協議会（以下、「性教協」とする）の機関紙である『季刊セクシュアリティ』（2001 ～、以下『セクシュアリティ』と省略）と、その前身である『性と生の教育』（1995 ～ 2001）、『Human Sexuality』（1990 ～ 1995）を調査対象とした。

これら雑誌は、『Human Sexuality』の時代から、性教育が人権につながるものであると主張している。『Human Sexuality』創刊号において山本直英は、「人間の性」を「人権として尊重」するための認識を、本雑誌を通じて社会に普及していきたいと宣言している[14]。創刊号においてこのような宣言がなされるように、性教協ではその初期の頃から、性教育と人権を結びつけるための啓発活動が行われてきた。日本全国における性教育のセミナー、雑誌をはじめとする書籍刊行を通じての啓発活動など、その活動の範囲は幅広い。

「人間と性をめぐる教育と文化の総合情報誌」と称されているように[15]、これら雑誌では、「性教育」にまつわる物事全体について理論・実践の両面から議論が掲載されている。これら雑誌は基本的には、性教育の教材として、または読み物として読まれるように作られているため、論文調の論考は少ない。読者層は、基本的に性教育に関心のある、ある程度限られた層であろう。学校教員・研究者が基本的な読者として想定され、雑誌の購入手段は、基本的には定期購読である。生教協には全国に支部があることからも、ある程度雑誌の定期的な購読者は存在し続けていると考えられる。また、本誌（特に、『セクシュアリティ』以降）は公共図書館・大学図書館には広く所蔵されているためか、「一般の人」や「母親」に向けたような記事も散見される。そのため、記事自体は潜在的な読者層を広く見積もったものも多い。ページ数は、全体として 100 ページ近くあるものとなっている。季刊誌であるために、

その初期の頃から、基本的には三ヶ月に一度の刊行である。

以上のように、「人権」としての性教育を推進しているという性質、全国展開された性教育の総合誌であるといった性質、継続してまとまった分量の情報が提出されていることなどから、これら雑誌を分析対象とするのは本論の目的から言って妥当であると思われる。

調査対象とする期間は『Human Sexuality』の創刊号が発刊された 1990 年から、『セクシュアリティ』の 2019 年の号（第 93 号）までとした。これら雑誌の全ページを「めくり」の作業で調査し、幼児期の性教育に関する話題が主題の一つとして扱われている記事を整理した（表 1，2，3 を参照）。表内の空欄は、その号数には幼児期の性教育に関する記事が見られなかったということを指す。

これら雑誌では、幼児期向け、小学校低学年向け、小学校高学年向け、中学生向けというように、紹介する性教育の種別を子どもの年齢層で明確に腑分けする傾向がある。筆者がある記事を幼児期の性教育に関する記事であると特定する際には、その傾向を基本的に利用した。また、「幼児」「幼児期」といった概念が無くても、3 ～ 5 歳の子どもを対象にした性教育の記事も集計している。「出生直後のケア」のような、乳幼児の身体ケアの話題や、出産をした母体のケアに関する記事は除外した。

つまるところ、『セクシュアリティ』などの性教協の雑誌では、明確に小学校低学年とは腑分けされた「幼児期」という世代が意識されているので、幼児期の性教育に関する記事を特定すること自体は容易である。ただ、幼児期の性教育で示されている個々の性教育の内容は、小学校低学年で行う性教育の内容と似通ることはある。そうした似通る内容の中で重要な議論が小学校低学年の性教育に関する議論で観られる場合には、そのことも適宜着目することとする。

本調査からは、『セクシュアリティ』からは 93 号までで 80 件、『性と生の教育』からは全号を通じて 14 件、『Human Sexuality』（1990 ～ 1995）からは全号を通じて 8 件の記事が確認された。

2 － 2　幼児期の性教育に関する記事の立ち位置

これら雑誌で見られる幼児期の性教育に関する記事の立ち位置の評価は難しい。幼児期の性教育に関する特集記事の存在が少ないことから、やや周辺的に位置づいていると評価することもできるだろう。具体的にいえば、『セクシュアリティ』62 号において「ここからスタート！幼児への性教育」という特集が一度組まれるものの、それ以前と以降は、幼児期の性教育に関する特集は組まれていないのである。また、「性教育実践」の特集において、幼児期

の性教育に関する実践報告が載せられないこともしばしばある。たとえば、『セクシュアリティ』においては定期的に「性教育実践」の特集が組まれており（例えば、「性教育実践」と名の付く特集の号だけでも 12 件ある）、各学校種別（小学校や中学校など）の性教育実践が紹介されている。ただし、小学校、中学校などでの性教育実践の報告はどの特集でも掲載されているのに対し、幼稚園や保育園の中での性教育実践、つまり幼児期の性教育に関する実践報告が存在しない号がある（例えば、25 号、71 号、80 号）。

表 1 『Human Sexuality』内、幼児期の性教育記事リスト

※1 性行動とは、幼児期のマスターベーション・性器いじり、恋愛、性行為への関心・他者の性器への関心などの「問題」について扱ったものを指す

※2 幼児へ性教育をする主体に、主として女性を想定しているものは○で表記（図像によって暗に示しているものも含む）

号数	年	タイトル	教育者の母親（女性）モデル※2	実践報告記事	調査研究記事	啓発・アドバイス記事	誕生に関する質問・出生の仕方を教える	性行動への対応※1	性別役割批判	性的自尊心・性の肯定	性的マイノリティ差別批判	性犯罪・性虐待防止	その他
1	1990	女らしさと男らしさについて		○					○				
同上	1990	文学に描かれた性と生　「からだ」との出会い											○
同上	1990	早期性教育の必要性を痛感――生命を育む母と子へ	○	○		○	○			○		○	
2													
3													
4	1991	魯迅先生と性教育											○
5													
6													
7	1992	親へのアドバイス　子どもの性の質問・疑問――こんな風に答えたら、考えてみたらどうですか？　男の子編	○			○	○						
同上	1992	親へのアドバイス　子どもの性の質問・疑問――こんな風に答えたら、考えてみたらどうですか？　女の子編	○			○	○						
8													
9													
10													
11													
12													
13													
14	1994	「異性愛」を前提とする性教育は、たとえ科学的・先進的であれ、賛成できない！				○	○				○		
15													
16													
17													
18													
19	1995	子どもの性・性のめざめ						○					○
20													

表２　『性と生の教育』内、幼児期の性教育記事リスト

※１　性行動とは、幼児期のマスターベーション・性器いじり、恋愛、性行為への関心・他者の性器への関心などの「問題」について扱ったものを指す
※２　幼児へ性教育をする主体に、主として女性を想定しているものは○で表記（図像によって暗に示しているものも含む）。△は解釈の幅が広いものを指す。

号数	年	タイトル	教育者の母親（女性）モデル※2	実践報告記事	調査研究記事	啓発・アドバイス記事	誕生に関する質問・出生の仕方を教える	性行動への対応※1	性別役割批判	性的自尊心・性の肯定	性的マイノリティ差別批判	性犯罪・性虐待防止	その他
1													
2	1996	「おちんちんがげんき」の絵本づくり				○			○	○			○
3	1996	「赤ちゃんはどうやってつくるの」？	○			○							
同上	1996	私はこうして性交を知った											○
同上	1996	かわいいおちんちんがついてきた！				○				○			○
4	1996	アドバイス　子育てのなかではどう語ればいい？	△			○			○	○		○	○
5	1996	親だから、できること				○		○		○		○	○
6													
7													
8	1997	「からだっていいな」の賛歌が生の学習を始める第一歩－－「心」も大切だが、「からだ」もすばらしい				○				○		○	
9	1997	「赤ちゃんはどこから？」はこの本から学ぼう！				○	○		○				
9	1997	Q &A－－疑問・悩みに答えます	△			○	○						
10													
11													
12													
13	1997	父母の悩み・疑問に答えます	○			○		○				○	○
14	1997	性的虐待－－どう発見し、対応したらいいか				○						○	
15													
16													
17													
18													
19	1998	性教育では性的虐待にどう関わるか－－幼児期からの人権教育を							○			○	
同上	1998	幼児虐待への対処とは？				○						○	
20													
21													
22													
23													
24													
25													
26	2000	お医者さんごっこ考											○
27													
28													

表３　『季刊セクシュアリティ』内、幼児期の性教育記事リスト

※１　性行動とは、幼児期のマスターベーション・性器いじり、恋愛、性行為への関心・他者の性器への関心などの「問題」について扱ったものを指す
※２　幼児へ性教育をする主体として主として女性を想定しているものは○で表記（図像によって暗に示しているものも含む）。△は解釈の幅が広いものを指す。

号数	年	タイトル	教育者の母親（女性）モデル※2	実践報告記事	調査研究記事	啓発・アドバイス記事	誕生に関する質問・出生の仕方を教える	性行動への対応※1	性別役割批判	性的自尊心・性の肯定	性的マイノリティ差別批判	性犯罪・性虐待防止	その他
1													
2													
3													
4													
5													
6													
7													
8													
9													
10	2003	幼稚園・保育園 乳幼児期の性教育（性教育実践2003）	○	○			○			○			
11	2003	助産師だから見える“いのち”を性教育で	△	○			○	○		○			
12	2003	保育実践におけるジェンダー問題を模索する		○					○				
同上	2003	ジェンダー平等の視点から：性の教育実践をふり返る				○			○				
同上	2003	性にとらわれない子育てで子どもの心を育む：子どもに多様な未来を用意するために			○				○				
13													

号数	年	タイトル	教育者の母親（女性）モデル※2	実践報告記事	調査研究記事	啓発・アドバイス記事	誕生に関する質問・出生の仕方を教える	性行動への対応※1	性別役割批判	性的自尊心・性の肯定	性的マイノリティ差別批判	性犯罪・性虐待防止	その他
14	2004	家庭でできる性のお話	○	○			○			○			
同上	2004	性教育をはじめる人に深めたい人に薦めたい本											○
15	2004	性暴力 就学前の子どもへの性教育：性と人権		○			○			○			
16													
17	2004	育ちのなかの性(No.4)	○			○	○						
18													
19													
20	2005	性教育の全体像を描く				○	○			○		○	
21	2005	ひろがる地域の活動 おちんちんどうやってあらってる?―昭島市「あおばの会」	○	○									○
22													
23													
24	2006	ワンポイント性と生の話　たいせつなからだ―おしりはどうやってふくのかな？				○							○
同上	2006	ワンポイント性と生の話　赤ちゃんはどこから生まれるの？											
同上	2006	ワンポイント性と生の話 「おとこのこ」「おんなのこ」	○			○	○		○	○			
同上	2006	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする? 幼児期編(1)	○				○						○
25													
26	2006	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする? 幼児期編(2)オープンとクローズのマナー	○			○							○
同上	2006	新連載 幼児期にしたい性のお話Q&A（Q1） パンツのなかに手を入れて、性器いじりをしている子をみたら…	○			○		○					
27	2006	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする? 幼児期編(3)オープンとクローズの実際	○			○				○			
同上	2006	幼児期にしたい性のお話Q&A（Q1（ママ））「おちんちんと、え～と女の子は？！…」性器の呼び方はどうすればいい？	△			○				○			○
同上	2006	親への性教育が必要―助産師の視点から	○			○							○
28	2006	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする? 幼児期編(4)性器いじりについて	○			○	○	○					
同上	2006	幼児期にしたい性のお話Q&A　Q3あかちゃんはどこから？（ボクはどうして生まれたの？）と突然きかれたら	○			○							
29	2007	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする? 幼児期編(5)『おちんちん』について	○			○							
同上	2007	幼児期にしたい性のお話Q&A(4)立ってオシッコができるよ!(スカートがはきたい!)	○			○			○		○		○
30	2007	助産師 おちんちん学級って、なに～? 助産院ではじめる性の健康教育	○	○			○			○		○	
31	2007	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q 5)"セックス、セックス"と叫んでいる子を前にして―性用語を使うことをどう考え、どう受け止めるか	○			○		○					
同上	2007	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする?(幼児期編・6)子どもの変身願望!?	△			○			○		○		
32	2007	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする?(幼児期編 7)人間も交尾するの?	○			○	○	○					
同上	2007	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q6)あたらしいお母さん(お父さん)がきたんだよ(うちはお父さんと二人なんだ)―離婚と家族を考える				○							○
33	2007	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする?(幼児期編 8)『おっぱい』について	○			○		○					○
同上	2007	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q7)ボク(ワタシ)を使いたがる子には、こんなことばかけを―言葉のなかのジェンダーを考える				○			○				
34	2008	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする?(幼児期編 9)お父さんって!?	△			○	○						
同上	2008	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q8)女の子は"あっち行け～!"―ジェンダーによる男女分離を考える	○			○			○				
35													
36	2008	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする?(幼児期編 10)子どもに伝え上ようと思ったけれど…	○			○	○						○
同上	2008	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q9)おフロでこんなことを聞かれたら				○							○
37	2008	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!―家庭でのこんな困ったをどうする?(幼児期編 11)きょうだいができる!	○			○	○						○
同上	2008	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q10)おチンチンを見せる人がいたんだ!―性犯罪から子どもを守る	○			○						○	
38	2008	セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション!(最終回)家庭でのこんな困ったをどうする?(幼児期編 12)親の手を離れ…自分の身は自分で守る	○			○						○	
同上	2008	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q11)どうしてKちゃんは足がわるいの?―障がいをどう話すか				○							○
39	2009	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q12)保育のなかのいじめ問題をどう考える―暴力にどう立ち向かうか											
40	2009	保育園・幼稚園での隠れたカリキュラムとしての「個人マーク」―保育者のジェンダー意識との関連で―			○				○				
41	2009	幼児期の発達課題として必要なこと				○				○			○
同上	2009	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q13)"オカマ"ってなんなの?―同性愛への偏見の刷り込みに抗して				○			○	○	○		
42													
43	2009	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q14)死んだら、どうなるの?―生と死の教育へのチャレンジ											○
44	2010	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q15)大きくなったら、ワタシも赤ちゃん生まれの?―ワンパターンではない人生を語ろ				○	○		○				
45	2010	これならできる幼児期の性教育	○			○	○		○	○			
同上	2010	幼児の性教育ってなに?なぜやるの?	○	○			○		○	○			
46	2010	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q16)お父さんとお母さんはセックスするの?―愛情を語るとき				○	○						

号数	年	タイトル	教育者の母親(女性)モデル※2	実践報告記事	調査研究記事	啓発・アドバイス記事	誕生に関する質問・出生の仕方を教える	性行動への対応※1	性別役割批判	性的自尊心・性の肯定	性的マイノリティ差別批判	性犯罪・性虐待防止	その他
47	2010	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q17)子どもはキスしちゃいけないの?―性行動へのアドバイス				○		○					
48													
49	2011	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q18)ボク、おチンチンが立ってきちゃった!―性器とのつきあいはじめ	○			○		○					
50													
51													
52	2011	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q19)『性教育国際ガイドライン』が発表されたようですが、それはどんな内容なのでしょうか				○	○	○	○	○	○	○	○
53	2011	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q20)幼児期の性教育をすすめていくうえで、子どもの生活をどのように見ておけばいいでしょうか。				○	○	○	○				○
54	2012	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q21)幼児期の性教育をすすめていくうえで、大切なテーマのポイントと分岐点はどのようなものでしょうか。				○			○	○	○		
55													
56	2012	『季刊セクシュアリティ』おすすめ絵本85選				○							○
57	2012	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q22)いのちをめぐる性教育実践について、そのポイントを考え直してみると、どのような点があるのでしょうか				○	○						○
同上	2012	知っていますか！？スクール・セクシュアル・ハラスメント				○						○	
58	2012	幼児期にしたい性のお話Q&A(23)幼児期の性教育実践をすすめるためには、どのようなちからが求められるのでしょうか。				○	○		○	○	○		
59	2013	「いのちの学習」キーワード16				○	○			○			
同上	2013	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q24)子ども自身の名前について親・保護者に聞いてくる実践がありますが、どう考えますか?				○							○
60													
61	2013	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q25)子どもポルノが新聞などで問題になっていますが、子どもにはどのように話したらいいでしょうか?				○						○	
62	2013	対談 ここからスタート! 幼児への性教育				○	○	○	○	○		○	
同上	2013	保育の現場からのセクシュアリティ	△	○			○		○	○			○
同上	2013	座談会 幼児期は、からだ観や性への意識を育てるスタート：生活体験を通して子どもの疑問にこたえよう!				○	○	○	○	○			
同上	2013	ここからスタート!幼児への性教育Q&A25	○			○	○	○	○	○		○	○
同上	2013	幼児期にしたい性のお話Q&A(Q26)幼児期の子どもたちにも「性器」について教えなくてはいけないものですか?				○				○			
63	2013	幼児期にしたい性のお話Q&A(27)スウェーデン・フィンランドの保育・性教育視察の旅から				○			○				
64	2014	新刊紹介『幼児・小学生、そしておとなへ あっ!そうなんだ!性と生』を出版して				○	○			○			
同上	2014	幼児期にしたい性のお話Q&A(28)性器の名称はどう呼ばれてきたのでしょうか				○				○			
65													
66	2014	幼児期にしたい性のお話Q&A(29)『あっ!そうなんだ!性と生』の発刊とこれから深めたい、いくつかのこと				○	○			○		○	
67	2014	幼児期にしたい性のお話Q&A(30)連載を終えるにあたって				○							○
68													
69	2015	『育つ(育てられる)ものとしての父親』・くさぶえ保育園の保護者として：「福神漬け」的な立場からの一歩				○							○
70													
71													
72	2015	5　生殖の仕組み				○	○						
73													
74	2016	幼児期に育てたい"からだ観"		○					○	○		○	
同上	2016	セクシュアル・マイノリティ リレートーク 虹の架け橋(31)本日も安定の揺れ				○			○	○	○		
75													
76													
77													
78													
79													
80													
81													
82	2017	「ガイダンス」の視点で読み解く『あっ！そうなんだ！性と生』				○	○	○	○	○	○	○	○
83	2017	男性保育士論争が提起しているもの				○						○	○
同上	2017	大切なものには名前があるよ：5歳児たちへ性教育 これから実践する方々への手紙	△	○						○		○	○
同上	2017	座談会 幼児期の性教育を保障するために：子どもに寄り添うおとなの子ども観と性の学び				○			○	○			○
84													
85													
86													
87													
88													
89													
90	2019	幼児期におけるいのちの教育：支援の必要な児、家庭と共に	○	○			○			○			
91	2019	セクシュアル・マイノリティ リレートーク 虹の架け橋(42)じぶん、まる!：ひとりじゃないよ。じぶんでいいよ。		○					○		○		
92													
93													

そしてまた、これら雑誌では、幼児期の性教育に関する記事が大部なかたちで掲載されることもあまりない。表１～３における「啓発・アドバイス記事」に該当する記事が多いことはそのことを示しており、こうした記事はコラム的な扱いで、１～４頁程度の短い分量のものが多い傾向にある。

とはいえ、これら雑誌において幼児期の性教育を軽視しているのかと言えば、そうとは言えない。これら雑誌においては、幼児期という早期から正しい性教育をしなければならないという主張は定期的に行われる[16]。例えば具体的には、「人権として性を学習する」はじめとして[17]、「ジェンダー平等を踏まえた人格の形成」を目指す第一歩として[18]、幼児期の性教育は重要であり実施しなければならないのだと説かれる。このように幼児期の性教育が重要だとされるゆえんは、幼児期は性に関するさまざまな社会的な認識を獲得し始める時期であるという発達的観点から、そのはじまりの頃に「正しい」性に関する知識や認識を獲得させ、子どもの人格の水路付けをしていこうとする意図からきている。

そして、特集は組まれにくいものの、表に見るように幼児期の性教育に関する長期連載が組まれることはある。これら雑誌が性教育の総合雑誌ということを加味して考えれば、一つの教育段階の記事に対する比率が少なくなることは、ほぼ必然であるとも考えられる。その上で、以下に見るように類型化可能な議論の傾向が抽出できるのであれば、これら雑誌における幼児期の性教育に関する記事の立ち位置は、メインストリームとは言えないが周辺的だとも言えず、ある程度安定的に位置づいていると評価できるだろう。

２－３　類型化可能な議論の傾向

表１～３に見るように、幼児期の性教育に関する記事には、いくつかのカテゴリに分けることのできる論調の傾向が見られた。例えばそれは、幼児期から自身の性器を「汚いもの」とみなさないようにすること、自身の性別の在り方（性別にとらわれないことを含め）を肯定していくことを子どもに獲得させようとする「性的自尊心・性の肯定」カテゴリに類する議論である。また、「私はどこから生まれたの？」などの幼児からの「誕生に関する質問」に大人はどう応えるべきかをアドバイスする議論も見られる（表内、「誕生に関する質問・出生の仕方を教える」カテゴリ）。これは、幼児の「性行動への対応」（幼児期のマスターベーションや性行為への関心）カテゴリで見られる議論とアドバイス内容が類似することも多い。そして、幼児期から性別役割分業観を身につけさせないようにするために、幼児に適切な教育的働きかけをしていこうとする「性別役割批判」カテゴリの議論もみられる。

本調査の結果、このようにカテゴリ分け可能な議論の傾向が見えてきたわけだが、幼児期

の性教育に関する記事には、こうしたどのカテゴリの議論にも関連のある一つ議論の形式がある。それが、表１～３で頻繁に「○」印が付されている、「教育者の母親（女性）モデル」という形式である。

そして、本論の問いである「幼児期の性教育は何を語ってきたのか」は、この「教育者の母親（女性）モデル」の議論が、雑誌上でどのように展開されていったのかを主軸として触れていくことによって、より整理された形で提示可能となる。そのため、本論では以下から、この「教育者の母親（女性）モデル」の議論が何であり、これが幼児期の性教育に関する議論にどのように付随してくる問題なのかを明らかにすることによって、本論の問いに一つの答えを提示していきたい。

２－４　教育者の母親（女性）モデルとは

以下、本論で述べる教育者の母親（女性）モデルという概念は、複数の状況を指す概念であるため、ここで簡潔にその意味することを述べておく。

まず、教育者の母親（女性）モデルというのは、記事のなかで幼児を性教育する主体として母親（女性）が想定されている状態のことを指す。また、幼児の性教育をする上で母親という存在を必要不可欠とする表現が見受けられるものも指す。こうした考えを反映している記事は、多くの場合、教育の場面に父親の不在がある。後に述べるように、『Human Sexuality』の時代から、分析対象の雑誌では性別役割分業観を人権の観点から批判している。であるなら、「女性は主体的に幼児の教育や世話をすべき」というような観念は否定してしかるべきである。当然、幼児を性教育することが母親（女性）によってしか行えないことは原理的にはあり得ない。ジェンダー平等の観点に立ち、育児に性別役割分業観を介在させるべきではないと考えるならば、幼児の教育者を表現する際には「親」「大人」のようなジェンダーレスな表現で示すことが適切だろう。そのため本論では、記事の中で幼児の性教育する主体をあえて「母」「女性」に偏らせて表現する傾向が見られた場合、それを教育者の母親（女性）モデルの見られる記事とみなし、その意味を分析していきたい。

また、記事によっては時折、幼児期の性教育の場面を絵で表現した挿絵が挟まれることがある。その際、記事における挿絵表現が母役割を強調しているなどの性別役割分業観が見られる場合も、教育者の母親（女性）モデルであるとみなし適宜言及していく。

3 『Human Sexuality』にみる教育者の母親（女性）モデルとそれへの批判

3－1 『Human Sexuality』における教育者の母親（女性）モデル

『Human Sexuality』では、のちの『性と生の教育』『セクシュアリティ』と比べると、幼児期の性教育に関する記事が掲載されている号は少ない。しかしながら、『Human Sexuality』には興味深い記事が複数ある。

先に述べたように、『Human Sexuality』をはじめとする性教協の雑誌では、性教育を人権保障のための教育であると位置づけている。『Human Sexuality』においては、その創刊号から、教育やその他生活の中で生じがちな性別役割の子どもへの押し付けが、性差別の温床であるとして批判の対象となっている[19]。

しかし、『Human Sexuality』における幼児期の性教育に関する記事においては、教育者の母親（女性）モデルとみなすことができる記事が散見される。例えば、竹内民子の「早期性教育の必要性を痛感―生命を育む母と子へ―」という記事では、その記事タイトルにあるように、「早期性教育」の必要性を訴える対象が「母」に絞られている。記事内容も、適切な幼児期の性教育の実施には「親、特に母親」の「意識改革」が重要だとしたうえで、母親は子どもの身体の発育に関する知識を得ることや「生命の大切さ」を乳幼児期から子どもに教えなければならないと訴えている[20]。また、家庭での性教育についてのアドバイス記事では、幼児期から小学校低学年の子どもの「性の質問」への親の受け答えを想定して、次のように返答例を示している。

> “こう答える”といっても、あくまでもモデルの一つであって、“こうでなければならない”というものはありません。例えば「赤ちゃんは、どうして産まれるの？」という質問には（…）「お母さんのおなかから産まれるのよ」であったり、「お父さんの精子とお母さんの卵子が一緒になって、お母さんのおなかの中で大きくなって赤ちゃんになるのよ」との答え方もありましょう（棒線筆者、以下同じ）[21]

> Q　赤ちゃんは、どこから生まれるの？
> A　ワァ、楽しい質問ね。さあ、答えましょう。（…）[22]

ここでは、子どもの誕生に関する質問に適切にこたえることを通じて、子どもに自己肯定感や命の大切さ、性に関する知識を与えることが推奨されている。注目したいのは、返答例

が示されるなかで、その返答例の具体的な提示の仕方に、「ね」「よ」「わ」のようないわゆる「女ことば」という役割語が用いられている点である。役割語とは、情報の受け手が「ある特定の言葉づかい（…）を聞くと特定の人物像（…）を思い浮かべることができる」効果を持つ言葉づかいのことである[23]。金水敏によれば、こうした女ことばは近年では女性全体の言葉づかいを表現しているというよりも、「奥様ことば」を表現する手段として機能している側面があるという[24]。つまりここでは、女ことばを用いることで、女性の中でも母という存在が想起されていると考えられる。

つまるところ、これらの記事では、家庭の中で幼児期程度の子どもの性の質問に答える主体として、特に必然性はないのにもかかわらず、母親が無前提に想定されているのである。このように、具体的な性教育の場面が例示される際に、その例に登場する人物の発話が女ことばになっているといったことはこの後も頻出するため、このことはおさえておきたい。

このように、『Human Sexuality』における幼児期の性教育の記事には、教育者を母（女性）としてもっぱら想定している、教育者の母親（女性）モデルと言ってよい表現が見られる。こうした教育者の母親（女性）モデルと見なせる表現は、『Human Sexuality』以前の性教協の刊行物にもみられるし[25]、1990 年代のこの時点では幼児期の性教育に関する議論で見られがちな、ある程度定式化した慣行であったと考えられる。

3－2　教育者の母親（女性）モデルに対する批判

しかし、『Human Sexuality』で特徴的なのは以上の点ではなく、教育者の母親（女性）モデルに関連する規範性を、批判的に捉える記事が同時に存在しているという点である。この批判を明確な形で展開しているのは、中村七重の「『異性愛』を前提とする性教育は、たとえ科学的・先進的であれ、賛成できない！」という記事である（第 14 号）。

中村は、レズビアン・ゲイの人権を訴える立場から、性教育が、性の多様性を侵害する表現を用いているとする。そうした表現は、まず、「生命の誕生」のありかたを子どもに教える性教育から見られると主張している。中村は、同性愛カップルで子どもを持つ世帯や、そのほかにも様々な事情から一夫一婦の状況にない子どもを持つ世帯があることに着目し、「出生時、乳幼児の時から、すでに『お父さんとお母さんがいて』っていう物語から外れている子どもはいっぱいいる」とする。そのうえで中村は、異性愛家族の存在を前提とした性教育の記述は多様性が損なわれているとする。そして、本当に「反差別的性教育」をしようとするのであれば、母や父の役割性を前面に出し、かつ異性愛主義に傾倒した「差別的」な性教育はやめるべきだとしている[26]。

類似した観点からの指摘は他にもある。平林宏美は、「妊娠や出産・誕生」を扱う性教育の場面においては、時に「母性尊重主義」になりがちなことを批判している。平林は、そうした性教育が行われる際に、「母」という存在が強調されすぎることで、「『女は子を産み、育てるのが当たり前』といった考え方や『母性本能論』『母性愛に関する神話』『育児天職論』陥りやすくなるのではなかろうか」と危惧を表明している[27]。もっとも、この平林の指摘は、小学校段階での性教育に関する文脈の中で述べられたものである。だが、「妊娠や出産・誕生」を扱う性教育の場面に関して述べているという点から、幼児期の性教育の場面でも見られる教育者の母親（女性）モデルへの批判的視点ともなるものが提出されていたと見做すことができる。

3－3　まとめ

以上のように、『Human Sexuality』では、幼児期の性教育に関する記事自体は少ないものの、教育者の母親（女性）モデルを示す記事と、それへの批判的観点となる記事の両者が見られる。とくに、教育者の母親（女性）モデルへの批判となる視点の提示は、その批判が提出されたことによって、今後の幼児期の性教育に関する記事の傾向が変化するのではないかという予測がたつ。そしてここでは、教育者の母親（女性）モデル的表現に対して、性別役割分業観への批判と、異性愛主義批判の観点からの批判が出されたことをおさえておきたい。教育者の母親（女性）モデルへの批判的主張が見られるということから、幼児の教育者として母親という片方の性が想定されがちであることに気づいていた人が少なからずいたのである。

では、『Human Sexuality』から『性と生の教育』に移行して以降、どのような幼児期の性教育に関する記事が展開されていくのだろうか。

4　『性と生の教育』にみられる教育者の母親（女性）モデルへの批判

4－1　『性と生の教育』にみられる教育者の母親（女性）モデル

『Human Sexuality』とその刊行期間の大差はないものの、『性と生の教育』では幼児期の性教育に関する記事の掲載数が8件から14件へと漸増している。

幼児期の性教育に関する記事では、「母親」にのみ宛先を絞った、あるいは偏らせてメッセージを届けようとする教育者の母親（女性）モデルと見なすことのできる記事が引き続きみられる。

例えば、子どもの「赤ちゃんはどうやってつくるの？」といった質問にどう答えればよいのかをレクチャーする記事では、語尾が「ね」「よ」「わ」と女ことばを発する母親が登場し、こうした質問に答える主体が母親であることが自明視されている[28]。また、「父母の悩み・疑問に答えます」という記事でも、幼児期への性教育を行う主体を母親として表現している[29]。

このように教育者の母親（女性）モデルに当てはまる事例はあるものの、しかし、『性と生の教育』の記事においては、それは上記の2件のみである。それ以外は、そうとは読むことはできない記事か、教育者を片方の性に偏らせて表現することに批判的な立場をとる記事になっている。

4－2　教育者の母親（女性）モデルへの批判

『性と生の教育』では、教育者の母親（女性）モデルへの批判として位置づけることのできる記事は、早くから見られる。

まずは、第2号に掲載されている田中良の「『おちんちんがげんき』の絵本づくり」という記事である。この記事では、男児に適切な性の知識を提供できるようになり、かつ「男の子の性」（性器の構造など：筆者注）のことを知らない母親も勉強となる性教育絵本を制作しようとした話が記載されている。これは一見、母親にのみ焦点を当てているがゆえに、教育者の母親（女性）モデルとして位置づきそうな記事である。しかし興味深いのは、この記事で例示されている「男の子の性を知らない母親」というのが、死別、離婚、単身赴任で夫のいない家庭の母親であるという点である。また、保育園に居る「保父」という存在に触れ、女性が担いがちな職業につく男性の生き方から、性別役割分業観に沿わない男児の育て方もできるのではないかとも提言されている。つまり、この記事では、教材や保育機関を利用することによって、いかなる状況や性別であったとしても幼児の性教育は可能であることが示されているのである[30]。次に第3号においては、幼児期の性教育に関する記事ではないが興味深い座談会記事がある。そこでは、小学校の教科書において性の知識が扱われる際には、挿絵に母子の絵ばかりが載っており、それが「母性」を強調しているために問題であり「異常」だと主張されている[31]。

その後も、幼児への性教育に関する議論で見られがちな教育者の母親（女性）モデルへの批判的立場に立つ記事は見られていく。「親だから、できること」というアドバイス記事では、「親」の在り方には父母の組み合わせだけでなく、離別によりそうでない場合もあるとしながら、「親」の子育ては「男らしく」「女らしく」などの役割期待を押し付けないようにすべ

きと訴えている[32]。また、山本直英の「『赤ちゃんはどこから？』はこの本から学ぼう！」という記事では、より直截的に教育者の母親（女性）モデルを批判している。この記事は、幼児期の性教育に使える欧米の絵本をレビューする記事なのであるが、山本は欧米における性教育絵本を、日本のものより優れたものとして概して評価している。そして山本は、あるレビュー対象の本を紹介するなかで、その本の描写においては「子どもと父親がいつも子育てに参加している」と評価し、このような「セクシュアリティへの深い洞察」が含まれた表現は「日本でもできそうな」ことであるのに、と日本の状況に苦言を呈している[33]。つまるところ山本は、日本の幼児向けの性教育絵本には、教育をする存在として母親ばかりが登場するゆえに、性別役割分業観を強化していると批判しているのである。

そのほか、特に性別役割分業観に対して直接的な批判を呈していなくとも、幼児の性教育を行う教育者として、母だけでなく父も登場させるなどし、教育者の性別の偏りがあるとは読めないようになっている記事も散見される[34]。

4－3　まとめ

以上、『性と生の教育』における幼児期の性教育に関する記事では、教育者の母親（女性）モデルに位置づけられる記事はあまり見られない。むしろ、それへの批判的視座を示している記事のほうが多い傾向にある。このことは、『Human Sexuality』で展開された批判を継承したものであるとの見方も可能ではあるだろう。

ただし、少量とはいえ、教育者の母親（女性）モデルと見なすことが可能な記事も同時に存在し、姿を消すことはなかった。

ただ、『性と生の教育』における教育者の母親（女性）モデルに批判的な視点には、その視点に偏りが見られる。というのも、以上紹介してきた批判には、性別役割分業観への批判は見られるが、異性愛主義への批判が見られないということである。つまり、父・母のどちらかがいない家庭の性教育を想定した記事であっても、それはセクシャルマイノリティの家庭を想定したものとはなっていない。あくまで、離婚などの理由で離別した異性愛家庭の話となっているのである。つまるところ、『性と生の教育』における教育者の母親（女性）モデルへの批判は、性別役割分業観に関する批判のみなのではある。

『性と生の教育』では、幼児期の性教育に関する記事全体の傾向としては教育者の母親（女性）モデルに批判的ではある。しかし、時折そう捉えることはできない記事も散見されるなかで、2000年以降の『セクシュアリティ』ではどのような記事が見られていくのだろうか。

5 『季刊　セクシュアリティ』からみる教育者の母親（女性）モデル ――議論の不継承

5－1 『季刊　セクシュアリティ』からみる教育者の母親（女性）モデル

『性と生の教育』から名称変更した『セクシュアリティ』は現在まで刊行されていることもあり、幼児期の性教育に関して触れている記事は比較的多いものとなっている（2019 年の 93 号までで 80 件）。また、記事が比較的多くみられる理由はそれだけではなく、幼児期の性教育に関する連載が組まれたり、1 度のみではあるが特集が組まれたりしたこともその一因だろう。特集や連載が組まれるということは、2000 年代以降は幼児期の性教育に関する関心がこれまでより高まっていると判断することもできる。その理由には、1990 年代後半からの「ジェンダーフリー教育」の流行と結実があり、その流れを受ける「ジェンダーフリー保育」などの動きが出てきたことがまず挙げられるだろう。

2000 年代は前提として、「ジェンダー」概念が日本ではすでに流通しており、ジェンダー平等を目指す様々な教育の実践や理論の成果が蓄積されている時期である[35]。それゆえ、1990 年代と比較して、2000 年代には、教育の場で見られる性別役割分業観に基づく考え方や感覚を批判的に検討せねばならないとした意識がこれまでより高まっていると考えられる。実際、『セクシュアリティ』においても、幼児教育・保育の場面で見られがちな、男児・女児を異なる扱いをする慣習への批判を展開する記事は早い号から見られている。そして、先の『性と生の教育』『Human Sexuality』において、教育者の母親（女性）モデルには批判がなされてきたということも先に触れた。

だが、そうした背景がありながらも、表 3 を見ると、特に 50 号までは教育者の母親（女性）モデルに「◯」印がついている記事が多いことがわかる。幼児期の性教育に言及する記事では、人間の誕生の仕方について幼児にどう教えればいいのかをアドバイスするものは早い号から見られる。そうした記事においては、幼児を教育する主体として母親（女性）ばかりが無前提に想定され、そのことに反省的視点を示さないものが複数あるのである。例えば、教え方の実践例を提示する記事は以下のような表現となっている。

> 赤ちゃんは、女の人の卵子といういのちのもとと、男の人の持っている精子という命のもとが出会って生まれるのよ。卵子は女の人の卵巣で育てられて、体の奥の方にあるの。（・・・）それが女の人の子宮の中で育って、やがて生まれるのよ。[36]

究極の質問“おかあさんもセックスしてるの？”（・・・）
「お母さんもセックスしてるの？」という素朴な質問をされたとしたら、「おとうさんとおかあさんはとっても仲良しだから、してるよ」（・・・）でもいいでしょう[37]

性器が男の子と女の子は少しだけ違います。
（A）だから、オシッコの仕方が少し違うのね。
（B）この違いは、おとなになって子どもを生む時の役目の違いにもなるのよ。[38]

こうした記事には父（男性）は登場せず、幼児からの性に関する質問への受け答えは母（女性）がするものという前提が見られる。幼児の性教育は母親がするものであるという「常識」のようなものが、記事からは読み取れる。

また、幼児の性教育は主として母（女性）がするものだという価値観を、挿絵を用いながら表現するものもある。例えば、記事における性教育の例示やアドバイスに「母」という用語や女ことばが用いられていなくとも、挿絵として母子が性教育する絵が挿入されており、教育をする主体として母が想定されていると読める記事がある[39]。

そして、『セクシュアリティ』には、これまで本論において紹介してきた教育者の母親（女性）モデルの表現を多用する連載記事が2件存在するということは注目に値する。それは、太田佳代子の連載記事「セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション！――家庭でのこんな困ったをどうする？」（全12回）と、浅井春夫の連載記事「幼児期にしたい性のお話Q＆A」（全30回）である。両者の記事は、毎回、テーマ別に幼児期の性教育に関するアドバイスを提供する記事である。表3に見るように、両者の連載はほぼ同時期に始まっており、『セクシュアリティ』における幼児期の性教育に関する記事全体の約半数を占めている。

5－2　連載記事における問題点

太田の連載記事では、ほぼ毎号、記事のなかで例示される性教育の場面には父親が登場せず、母親のみが教育や子どもの世話をしている場面が描かれている。母親を幼児の性教育を行う主体として描くことに対する反省的視点はこの連載記事からは見られない。そのうえで、幼児に対する「適切」な性教育の例示が様々に文章や挿絵で展開されている。そして、太田の連載記事では、母が性教育絵本を子どもに読み聞かせる挿絵（第1回、10回）、母が幼児の性的な行動・質問に動揺する挿絵（第3回、4回、7回、8回）、母が子どもを風呂に入れている挿絵（第1回、10回）、家事をしている母に子どもが問いかけている挿絵（第5回、

6 回)、父母で明確な性別役割が分かれていると読める挿絵（第 9 回）などがその回のテーマに合わせて挿入されている。

太田の連載記事には、少ないながらも父が登場する回がある（第 5 回、6 回、9 回)。しかしそれも､男児への性教育のパートナーとして父を利用しようという話であったり(第 5 回)、「お仕事する人」として父を描いた絵と、その後ろでエプロン姿の妻が洗濯物を抱えている絵を登場させる回（第 9 回）などがあったりして、明確な性別役割分業観が表現された回となっている。幼児期の性教育に関わる人として父が描かれてはいるが、こうした描き方ではむしろ性別役割分業観、性教育者の母親（女性）モデルを強化していると言える（図 1、2、3 も参照)。

・『セクシュアリティ』における幼児期の性教育に関する記事で見られる挿絵の例

※下記、図 1･図 2･図 3 は著作権を考慮し、筆者が該当ページのイラストの構図を模写した。

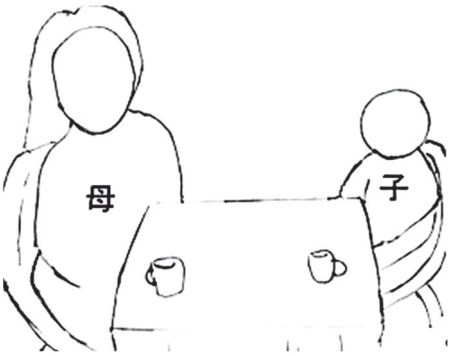

図 1 『セクシュアリティ』28 号、2006 年、120 頁のイラストの構図。母が子に家庭で性教育を施すさまが描かれている。

図 2 『セクシュアリティ』34 号、2008 年、148 頁のイラストの構図。母がエプロン姿で洗濯物を持ち、ネクタイ姿の父が子どもの相手をする場面が描かれている。

図３ 『セクシュアリティ』29 号、2007 年、130 頁のイラストの構図。母がエプロン姿で食器を片付けており、子がその母親に呼びかけている場面が描かれている。

ただ、第６回は、遊びですら男児と女児で異なっていることや、男女の職業の偏りなどを問題視し、子どもには自由な選択ができるように促していこうとアドバイスする記事となっている。この回では、「いろんな人が自然体で暮らすのってステキだね！」と文章が添えられ、「女性武道家」「男性メイクアーティスト」の例を挙げ、子どもに自由な生き方をさせるようにとしている。ただ、この回も一方では、母がオムツ替えをし、父が子どもを遊びにつれて出かけるという場面が絵で描かれているし、絵に登場する「男性メイクアーティスト」のセリフがなぜか女ことばであるなど、自由な生き方という観点からは疑問の残る表現が併存している[40]。

以上のように太田の連載記事は、「適切」な様々な性教育の仕方、そして時には幼児を性別の型にあてはめないようにとアドバイスしながらも、基本は性別役割分業観に貫かれた家庭の子育ての様子が描かれるために、性別役割分業観への批判が行われたとしても何の説得力の持たない記事となっている。そのことはつまり、太田の連載記事は、教育者の母親（女性）モデルが終始見られる記事であるということである。

浅井の連載記事の第１回では、総論として、ジェンダーが「刷り込まれる」のが３歳ごろからであると解説している。具体的には、「男女分離」や「男の子に女の子への性的優位の考え方」、そのほかに様々な「性の情報」が幼児期からはいりこんでくるのだとしている。浅井の記事からは、性別役割分業観を強く問題視していることがうかがえる。また、浅井はこの記事を、「とくに保育園・幼稚園（の先生？：筆者注）、子育て中の保護者」に読んでもらいたいとし、中性的な表現を用いている[41]。

しかしながら、『セクシュアリティ』50 号までの浅井の連載記事は、教育者の母親（女性）モデルが色濃く出ている連載となっている。まず、浅井の連載も挿絵が使われており、子どもの性的行動（性器いじりなど）に対応する女性保育士の絵（第１回、２回）、幼児に性教育をする母子の絵（第３回）というように、女性が幼児の性教育を実践する挿絵が使われている。男性が挿絵に登場する回は一度ある（第５回）。この第５回の挿絵は、幼児の性的な発言（「セックス」という発言）に大人（父、母、祖父）が動揺する絵が描かれている。し

かし、その描かれ方は父が会社員風の絵、母が買い物をしている途中の絵、祖父が胡坐をかき新聞を読んでいる途中の絵という、性別役割を表現した絵となっている。ただ、第 6 回以降、浅井の連載には、理由は定かではないが挿絵が使われることはなくなった。

とはいえ表 3 にあるように、こうした挿絵が使われなくなって以降も、それ以前も、浅井の記事には文章での教育者の母親（女性）モデルは見られる。以下に 3 例を提示してみたい。

> 性のお話で絶対してはいけないことはウソやごまかしです。答えられないことには、「いまその質問にうまく答えられないから、もう少し待っててね。おかあさん（先生）がきちんと調べてから、お話するからね（…）さすが年長さんだ、すごいね」と、質問したことに成長を感じほめてあげましょう [42]

> 男の子の優しさを評価してあげることもいいかもしれません。要は、男はこんな役割や態度をとるべきだと考え始めている子どもたちに、いろいろなことにチャレンジしてみることを子どもに伝えてみる実践が大切な時期であるのです。
>
> お母さんが子どもに寝る前にでも「お父さんが重い荷物を運んでくれた時は、とってもうれしかったな」ということなどを具体的に話してあげてもいいでしょう [43]

> 「どうして女の子にはおチンチンがないの？」という質問もときどきあります。あなたならどう答えますか？（…）
>
> こんなのはどうでしょう。「ほんとはね、女の子にもおチンチンはあるのよ。（…）
>
> ついでに「どうしてお母さんのおっぱいは大きいの？」という問いにもふれておきましょう。[44]

このように、浅井は、幼児期の性教育の適切な仕方を例示する際にはそれを行う主体に母（女性）を想定している。先に述べたように、浅井は幼児に性別役割を意識させてしまう教育の在り方を問題視していたし、第 7 回では「言葉のなかのジェンダーを考える」ことをテーマとして、性別で異なった、偏った言葉のコミュニケーションをしていないかどうかを「チェック」することを提唱している [45]。また、先の太田も、幼児に既存の性別役割分業観を身に着けさせることについては、批判的な立場を表明していた。

そのことを考えれば、以上の太田や浅井の記事のあり方は、自身が行なっている主張の整合性に難を抱えていると指摘できる。つまり、幼児への教育の場面において、幼児が性別役

割を身に着けていくことを批判しながら、その幼児への教育は母（女性）がするものという価値観を表現してしまっているために、主張に矛盾が生じてしまっているのである。

ただし、浅井の連載記事に関しては、第19回以降、教育者の母親（女性）モデルと見なせる表現は存在しない。興味深いのは、第21回（54号）において浅井が、これまでの自分の表現を省みるかのような記述をしている点である。第21回は「幼児期の性教育をすすめていくうえでの、「大切なテーマのポイントと分岐点」を改めて総論的にアドバイスする回なのであるが、ここで浅井は「出産、出生、いのちの大切さ」を伝える性教育において、「母子一体論の強調になっていることに注意をしたいものです」とし、幼児期の性教育が母親の存在を強調しがちであることを指摘している[46]。また浅井は別箇所で、幼児期の性教育をする際には「男も女のからだもほとんどは同じで、役割についても家事・育児は男性もできるし、保育園の場合は保護者が共働きであったりシングルで働いていたりすることがほとんどですから、そうした事実に即して語っていきたいものです」とし[47]、また、「家族の中の旧態依然とした性別役割分業論、父母と子どものいる画一的な家族像を押し付けるようなメッセージには注意しましょう」とも述べている[48]。これらはあくまでも、読者へのメッセージとして出されているものであるので、自身への反省を述べているのかどうかについては判別はつかない。しかし、これ以降浅井は前回までのような教育者の母親（女性）モデル的表現を、一つを除き（後述）、連載だけではなく自身の記事では使わなくなっているため、何らかの考えの変化や気づきがあったように読み取れる。

5－3　50号以降の傾向

表3に見るように、『セクシュアリティ』50号以降は、あまり教育者の母親（女性）モデルは見られなくなっていく。ただ、その理由については判断がつかない。国際的な性教育推進の動きが顕著になっていく時期（例えば、ユネスコにおける『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』（2009）が発表され、日本にも紹介されていった）であり、性教育における性の多様性への言及も以前よりも増えている時期ではある。そのため、教育者の母親（女性）モデルのような多様な性のあり方を排除する傾向のある観点が改められ始めたのだ、と仮説をたてることは可能だ。しかし結局のところ、そうした社会背景が関連しているかどうかというのは実証的には判別がつかない。見てきたように、『Human Sexuality』の時期から教育者の母親（女性）モデル的な考え方に批判的な声はあるし、そうした国際的な動きがなくても表現を改めることは可能である。それに、近年は単に幼児期の性教育を扱う記事数自体が少ないからそうした表現が見られなくなっているとも考えられる。仮に、近年の国際的な

動向に左右されただけであるとするならば、その場合は専門家として問題があると言わざるをえないだろう。

むしろここで重要なのは、近年は教育者の母親（女性）モデルの見られる数が減っていくといっても、それでも時折はみられるということであろう。その存在は完全には消えないのである。その様子を以下に触れていこう。

『セクシュアリティ』62 号では「幼児への性教育」に関する特集が組まれた号である。その特集には、「ここからスタート！幼児への性教育 Q&A25」といった、25 項目の Q & A を扱ったアドバイス記事が掲載されており、一つの Q & A にあたり 1 頁ずつ分量が割かれている。アンサーとしては、「具体的にこう伝えたらよい」といったように、特定の場面でどのように幼児に声を掛けたらよいのかが、具体的に例示される傾向にある。その Q & A において、状況的に母親が声をかければならないという必然性のある項目を除き[49]、特に必然性もなく台詞に女ことばを使用したり「母」が幼児に教育をする場面を描いたりしている項目は、25 項目中 10 もある。具体的には、例えば、「精通」に関することを話すにはどうしたらいいのかという質問に対して、なぜか「(…) 性器がその役目をしているのよ。(…)」[50] などと女ことばで回答例が示されているような記事が 10 例あるということだ。記事からは、なぜ女ことばで、あるいはなぜ母が幼児に伝えねばならないのかについては説明されていないために[51]、幼児への性教育は母（女性）がするものという、教育者の母親（女性）モデルを反映したものとなっている。

また、『セクシュアリティ』90 号では、ある家庭環境に「複雑な事情」を抱えた幼児がいる保育園での性教育実践記録の中で、「産道体験」（母親のおなかから産道を通って生まれる過程を追体験する学習）を中心とした性教育実践を行ったとしている。この教育実践は、幼児に「自分は愛され生まれてきた」ことを保護者（母）から「うまれてきてくれてありがとう」などの言葉をかけることで実感させ、自己肯定感を高めることが目指されている。ただ、この教育実践は、「母」から愛されて生まれてきたということを伝えなければならず、母という存在を必要不可欠としている。この実践では、子どもの自己肯定感の獲得を達成できたとの意義が述べられているが、実践の中で父という存在は見えてこず、きわめて母親依存的な教育となっている点で、教育者の母親（女性）モデルと言えるものとなっている[52]。「複雑な事情」を抱えた子どもに向けてということであれば、父子家庭などの母のいない家庭も想定されるが、その点については何も述べられていない。そして本実践を、雑誌の編集員は、「幼児期の包括的性教育の実践例として評価できるとともに、このような実践が広がることを期待」している[53]。

このように、『セクシュアリティ』では、教育者の母親（女性）モデルが以前よりも頻繁にみられなくなったあとも、時折、幼児期の性教育は母（女性）が担うことが適切である、あるいは母（女性）が担うものである、というある種の「常識」が表現されることがある。

5－4 『季刊　セクシュアリティ』における教育者の母親（女性）モデルへの批判

以上のように『セクシュアリティ』では、教育者の母親（女性）モデルに類する表現は息が長く続けられていくわけだが、同時に、教育者の母親（女性）モデルに類する表現や考え方に対する批判も続けられてはいる。その批判については、先に見た『Human Sexuality』や『性と生の教育』で見られた批判とそう質的に異なるものではない。

たとえば、『セクシュアリティ』4号（2001年）の川端多津子の記事では、人間の誕生について教える小学校の性教育実践を通じてであるが、教育者の母親（女性）モデル的な考え方について、以下のように批判している。

> 人間は出産するのが当たり前というすり込みは、産まない人、産めない人（産ませられない人）への差別につながる。快楽やコミュニケーションとしての豊かな性交を伝えたい。（…）
>
> 2つめは、出産をあつかった授業参観をみたひとりのお母さんの感想―「産んだことを別に感謝されたくありません」―たしかに受精は神秘的だし、命の誕生は感動的だけれど、それに「愛の結晶」とか「感謝」とか「母性」とかをむすびつけないようにしたい。3番目は、世の中には男と女しかいない、異性愛しかないという前提での性教育であり、多様な性という視点が全くぬけていたことである[54]

川端は、性教育において人間の誕生に関して扱う際には、理想的な母子の関係を前面に出してしまいがちであり、その結果多様な家族観・性愛観を子どもに教えることを疎かにしてしまう傾向にあるという。

そして、一時期は幼児期の性教育のアドバイスを述べる際に教育者の母親（女性）モデルを表現していた浅井も、上記の川端のような批判的視点を述べたことは見てきたとおりである。また、『セクシュアリティ』59号（2013年）では「いのち」の教育、つまり教育の現場で人間の誕生の仕方についてなどを扱う「いのち」に関する教育についての特集が組まれたが、そこでも次のような表現で教育者の母親（女性）モデルにつながる考え方は繰り返し批判されている。

（…）その上に立って性交を学習していけば、「そういうふうにして・精子は卵子におくられるんだ」とストンと落ちる学習になるはずです。そこには男女の愛情の話や、産んでくれてありがとうという母親への感謝に結びつける話も必要ありません。多様化する家族形態の中で暮らす子どもが増えていく中、科学的事実を脚色なく学ぶことが、自らのからだといのちを大切に思い、自分の成長発達を楽しみにできる子どもを増やしていくキーポイントです[55]

田代

私は個人的には、「親への感謝」といった内容を授業でやる必要があるのかについては疑問があるんです（…）

金子（…）

「あなたが生れる時は難産で、お母さんがどんなに大変だったか」みたいな。それを読み、現地でお母さんにお手紙書こうってストーリーです。やっぱり、おとうさんに手紙書こうって話は出てこないんだけど。そういう場面でも、担任は、母親のいない子に配慮したつもりで、生みの母親じゃない人からの手紙を預かってくるんです。（…）

担任は、その実践をすごくいいものと思い込んでいるんです。日頃は手を焼いている生徒がお母さんの手紙を読んで、みんなして泣くわけです。（…）でも、（様々な家庭背景から：筆者注）お返事が書けない子が、私のところに駆け込んできて「ばかばかしくてやってらんない」とか言ってふてくされてしまうんです[56]

ここでは、教育者の母親（女性）モデル的発想のもとに実施される教育が、子どもの感情にどのような影を落とすのかを含めて、詳細に批判されている。以上のようなかたちで、『セクシュアリティ』においては、教育者の母親（女性）モデルを反映した幼児期の性教育に関するアドバイス・実践例の提示と、教育者の母親（女性）モデル的な発想への批判が同雑誌に混在しているのである。

6　これまでのまとめ・考察――議論の不継承問題

以上、『Human Sexuality』『性と生の教育』『セクシュアリティ』における幼児期の性教育に関する記事の分析を通じて明らかになったことは以下のようになる。

これら雑誌では、初期のころから、人権の観点から性教育の推進を訴え続けており、子ど

もを教育する際に見られがちな性別役割分業観の押し付けなどが批判されてきた。しかし、幼児期の性教育に関する記事においては、性教育を実施する主体を母親（女性）に偏らせて表現する、教育者の母親（女性）モデルと呼ぶべき記事が継続して存在した。そうした記事からは、幼児への教育は母親（女性）が実施するものであるといった「常識」や、母親が実施することこそ適切であるといった感覚が読み解ける。

しかし、そうした「常識」に基づいた教育者の母親（女性）モデル的表現が慣習的に行われていたからこそ、その表現を批判する記事も同雑誌内で継続して展開されていた。それら記事では、幼児期の性教育をはじめとする低年齢の子どもへの性教育で行われがちな人間の誕生の仕組みを取り扱う性教育が「母性」を神聖視しており、性別役割分業観を強化したり、多様な家族観・性愛観を排除したりしていると批判している。これら雑誌の基本姿勢が性別役割分業観に批判的立場をとるのであれば、これらの批判は出現してしかるべきものであった。

しかし興味深いのは、こうした批判が初期のころから展開されていてもなお、教育者の母親（女性）モデルの表現は、現在に至るまで姿を消すことはなかったということである。以下では、その理由について考察してみたい。

一つは、これまで同雑誌で行われてきた議論を歴史的に把握する視点を欠いていたという、議論の不継承をめぐる理由だろう。本論１節でも述べたように、幼児期の性教育をめぐる研究においては、幼児期の性教育をめぐっていかなる議論が行われてきたのかという歴史的視点を持つ研究は極めて乏しかった。つまり、幼児期の性教育論を展開する人々は、自らが立っている立場を歴史的に振り返り、議論を整理する視点を持てていなかったのである。そのため、過去になされてきた批判を継承するという契機がなく、その意味でやや場当たり的な性教育論が行われてきたのだと言える。

二つは、一つ目と関連するのだが、教育者の母親（女性）モデルが表現されてしまう要因には、日本社会における根強い規範・「常識」が幼児の教育というものに潜んでいるからであろう。幼い子どもの世話をするのは母親である（べき）とする規範があることに加え、実際問題として、保育士や幼稚園教師などの男女比率の問題も含めて、幼い子どもの教育や世話を母（女性）が主に実践しているという現実が存在する。であるがゆえに、幼児を教育する主体に母親を想定してしまいがちであるし、また、したとしても正当化されやすい背景がある。だからこそ、性別役割分業観を批判していたとしても、一方では慣習的に、あるいは「無意識」的に、母（女性）を幼児の教育をする主体として想定してしまいがちになるのだろう。浅井春夫が『セクシュアリティ』50号あたりから教育者の母親（女性）モデルを基

本的には表現しなくなったということは先に触れたが、しかし浅井は、62 号の記事においては再び、幼児期の性教育をする主体に女性を想定した教育者の母親（女性）モデル的記事を書いている[57]。つまるところ、教育者の母親（女性）モデルというのは、性別役割分業観に対し基本的に批判的なスタンスをとっている論者にとっても、「無意識」的に発露してしまいがちなジェンダー観なのだろう。そうであるなら、教育者の母親（女性）モデルは、マイクロアグレッション（日常の中での言動に現れる偏見や差別）やアンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）などの近年議論されている問題系にも接続可能であると考えられる。

そのほかに、教育者の母親（女性）モデルを反映させた記事が多く書かれた理由には、アドバイスとして例示する教育者を母（女性）として描くことで、実践者となりがちである女性に向けた「わかりやすい」記事を書いたのだ、という説明もありうるだろう。

ただし、いくら実態として幼児の教育をする主体が母（女性）に偏っていたとしても、「人権」を掲げる多数の研究者・知識人が関わる性教育研究雑誌において、性別役割分業観を温存させる効果を持つ教育者の母親（女性）モデルを採用し続けるのは問題があるといわざるをえない。むしろ、読者は教育研究に関する雑誌を選択し読むほどの層であるのだから、そうした原則的な面はこだわってもよかったのではなかろうか。

以上の二つの要因が重なり、これら雑誌における幼児期の性教育に関する議論の質は、結果として著者依存となっていた。先の浅井のように経年により教育者の母親（女性）モデルを基本的には表現しなくなるといったケースにあるように、途中で論者によっては（おそらくではあるが）意識的に表現が改まる場合はあるが、そうした配慮が全般的に共有されているわけではなかったのである。

つまるところ、これら雑誌における幼児期の性教育に関する記事では、人権の名のもとに様々なアドバイスが提供されていたものの、人権という観点からは相性の悪い表現も付随させてきたのであった。

おわりに

本論では、日本における性教育研究雑誌『Human Sexuality』『性と生の教育』『季刊セクシュアリティ』における幼児期の性教育に関する記事を網羅的に分析することによって、幼児期の性教育に関する議論が何を語ってきており、どのような問題をはらんでいるのかについてみてきた。

これら雑誌における幼児期の性教育に関する記事においては、人権の観点から幼児に適切

な性に関する知識や態度を身に着けさせることを目的としていた。しかし、それら記事では教育者の母親（女性）モデルという、幼児の教育は母（女性）がするものという「常識」が同時に表現されてしまうことが多々あった。人権という観点からは問題のある性別役割分業観を批判しながら、しかし同時にその肯定ともとれる表現をしてしまっているのが、幼児期の性教育をめぐる議論なのである。そして、この教育者の母親（女性）モデルという考え方・観念・規範は姿を消すことはなかった。この教育者の母親（女性）モデルの根深さは、本論の「はじめに」で示した例を今一度振り返れば、現在までに根強く存在する規範であることが改めてわかる。『セクシュアリティ』では現在、そうした表現は見られにくくなってはきている。だが、本論で示したように、教育者の母親（女性）モデルの表現は再びまた姿を現す可能性があるため、人権としての性教育の推進を目指すのであれば、警戒してしかるべき表現であると言える。

注

1）論者によって、0 歳～ 5 歳と区切るもの、3 歳から小学校低学年程度までと区切るものなどの違いは時折見られる。

2）例えば、小泉友則『子どもの性欲の近代――幼児期の性の芽生えと管理は、いかに語られてきたか』松籟社、2020 年、368-372 頁を参照。

3）例えば、日本における代表的な性教育推進団体である、“ 人間と性 ” 教育研究協議会では、その最初期の刊行物『人間と性の教育』シリーズ（全 6 巻、1983 ～ 1986）の序言において、「日本に欠落していた人権としての性の尊重と、豊かで創造的な男女関係の確立を求め」るために、性教育を進めると明言している。

4）詳しくは、ユネスコ編『国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】――科学的根拠に基づいたアプローチ』明石書店 2020 年や、浅井春夫『性教育はどうして必要なんだろう？: 包括的性教育をすすめるための 50 の Q&A』大月書店 2018 年を参照。

5）例えば、のじまなみ『学校もママ友も教えてくれない明るく楽しい性教育　赤ちゃんってどうやってできるの？にきちんと答える親になる！』日本図書センター 2020 年、フクチマミ・村瀬幸浩『おうち性教育はじめます ――いちばんやさしい！防犯・SEX・命の伝え方』株式会社 KADOKAWA2020 年。こうした書籍においては、「無知」な母親が男性研究者に教えを乞う構図が多用されていたり、父親が登場したと思えば、男児に対してもっぱら教育を施していたり、「人権」という観点からは違和感のある表現が散見される。

6）アクロストン『3 ～ 9 歳ではじめるアクロストン式「赤ちゃんってどうやってできるの？」いま、子どもに伝えたい性の Q&A』主婦の友社、2020 年を参照。

7）田代美江子「性教育」藤田博康ほか編『児童心理学の進歩　2020 年版』金子書房、2020 年 176-204 頁。

8）池田政子「幼児・児童対象性教育図書の歴史と現状」『日本保育学会大会研究論文集』42 号、1989 年、408 － 409 頁、また、池田政子「幼児・児童対象性教育図書出版史：幼児の性に関する脱タブー化の視点から」『山梨県立女子短期大学紀要』24 号、1991 年、83-99 頁も参照。

9）たとえば、小野康友ほか「児童養護施設における性教育の実践」『現代教育学研究紀要』13 巻 2019 年 61-70 頁、小菅ゆみ「幼児期からはじめる性教育（1）幼児教育・保育」『新島学園短期大学

子ども学研究論集』5 号 2019 年 47-63 頁、佐藤怜「幼児の親の性教育に関する意向」『秋田大学教育学部教育研究所報』32 号 1995 年 70-87 頁など。

10）たとえば、山梨県立女子短大ジェンダー研究プロジェクト『0 歳からのジェンダー・フリー』生活思想社 2014 年、青野篤子『ジェンダー・フリー保育―次世代育成のヒント』多賀出版 2012 年、金子省子「ジェンダー・フリー保育の要件について」『日本保育学会大会発表論文集』56 号 , 2003 年 154-155 頁など。

11）たとえば、青野篤子「男女平等とジェンダーに対する保育者の意識」『福山大学人間文化学部紀要』7 号 2007 年 65-79 頁、青野篤子・金子省子「保育にかかわる保護者のジェンダー観」『日本家政学会誌』59 巻 3 号 2008 年 135-142 頁など。

12）たとえば、若井和子ほか「幼児期から親子で始める性教育が親子関係に与える効果」『川崎医療福祉学会誌』27 巻 1 号 2017 年、75-84 頁、若井和子ほか「幼児期にある上の子どもに親が行う性教育の実態」『日本看護学会論文集 母性看護』43 号 2013 年 92-95 頁、小野敏子「幼児期における性教育に関する幼稚園教諭の認識」『川崎市立看護短期大学紀要』14 巻 1 号 2009 年 55-61 頁など。

13）森本眞寿代ほか「家庭における性教育に関する研究の動向と展望――父親の性教育の実態」『母性衛生』59 巻 2 号 2018 年、519-526 頁。

14）山本直英「創刊の辞」『Human Sexuality』創刊号、1990 年、頁数なし。

15）『" 人間と性 " 教育研究協議会　公式ホームページ』https://www.seikyokyo.org/book/sexuality/newest.html、2020 年 9 月 2 日最終閲覧。

16）例えば、竹内民子「早期性教育の必要性を痛感―生命を育む母と子へ―」『Human Sexuality』創刊号 1990 年、大谷敏子「幼稚園・保育園　乳幼児期の性教育」『季刊　セクシュアリティ』10 号 2003 年、浅井春夫「これならできる幼児期の性教育」『季刊　セクシュアリティ』45 号、2010 年など。

17）山本直英「『愛と性』の低開発国からの脱出を図るために」『Human Sexuality』6 号 1992 年、8 頁。

18）前掲、浅井春夫「これならできる幼児期の性教育」14 頁。

19）例えば、落合恵子・村瀬幸浩「性差別　セクシュアル・ハラスメント、レイプ――その構造を根底から問い直す」『Human Sexuality』創刊号 1990 年 20 頁、竹内幸延「女らしさと男らしさについて」『Human Sexuality』創刊号 1990 年 34 頁など。

20）前掲「早期性教育の必要性を痛感―生命を育む母と子へ―」97-98 頁。

21）井形端「親へのアドバイス　子どもの性の質問・疑問――こんな風に答えたら、考えてみたらどうですか？　男の子編」『Human Sexuality』7 号 1992 年 82 頁。

22）安達倭雅子「親へのアドバイス　子どもの性の質問・疑問――こんな風に答えたら、考えてみたらどうですか？　女の子編」『Human Sexuality』7 号 1992 年 89 頁。

23）金水敏『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店 2003 年 205 頁。

24）金水敏「役割語とは何か――この辞典を利用するまえに」金水敏編『〈役割語〉小辞典』研究社 2014 年 XIV ページ。また、「おんな言葉」の具体性についても本書を参照のこと。

25）例えば、俵萌子「8　家庭における指導」人間と性 " 教育研究協議会編『人間と性の教育　4　恋愛と結婚、家族』あゆみ出版 , 1984 年、220 頁。

26）中村七重「『異性愛』を前提とする性教育は、たとえ科学的・先進的であれ、賛成できない！」『Human Sexuality』14 号 1994 年 43 頁。

27）平林宏美「教科書の問題点を探る　［小学校 5 年 = 理科］編」『Human Sexuality』7 号 1992 年 34 頁。

28）安達倭雅子「『赤ちゃんはどうやってつくるの』？」『性と生の教育』3 号 1996 年 51 頁。

29）著者名無し「父母の悩み・疑問に答えます」『性と生の教育』13 号 1997 年 58 頁。

30）田中良「『おちんちんがげんき』の絵本づくり」『性と生の教育』2 号 1996 年 56-59 頁。

31）高柳美智子ほか「座談会　説教っぽく語ると、子どもの心にはまったく響かない」『性と生の教育』

3 号 1996 年 10 頁。
32）富沢寿美子「親だから、できること」『性と生の教育』5 号、1996 年 76-77 頁。
33）山本直英「『赤ちゃんはどこから？』はこの本から学ぼう！」『性と生の教育』9 号 1997 年 10-15 頁。
34）例えば、安永しのぶ「かわいいおちんちんがついてきた！」『性と生の教育』3 号 1996 年 68-69 頁、永田静江「アドバイス　子育てのなかではどう語ればいい？」4 号 1996 年 63-64 頁など。後者の永田の記事は、記事内で取り扱われる事例がなぜ母子間の会話なのかという釈然としない表現もあるものの、別箇所で父の教育の在り方についても述べており、母のみの記述とはなっていない。このように、明確な教育者の母親（女性）モデルとしては見做せない記事となっている。
35）ジェンダーの視点から日本の教育を見直そうとする動向の変遷に関しては、例えば木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル』白澤社 2005 年、木村涼子編『ジェンダーと教育　リーディングス日本の教育と社会 16』日本図書センター 2009 年を参照のこと。
36）安達倭雅子「ここからスタート！幼児への性教育 Q&A 25　どうして赤ちゃんができるの？」『季刊　セクシュアリティ』62 号、2013 年、63 頁。
37）浅井春夫「幼児期にしたい性のお話 Q&A（Q 5）" セックス、セックス " と叫んでいる子を前にして―性用語を使うことをどう考え、どう受け止めるか」『季刊セクシュアリティ』31 号、2007 年、130 － 131 頁。
38）安達倭雅子「ワンポイント性と生の話 2・幼児期『おとこのこ』『おんなのこ』」『季刊　セクシュアリティ』24 号 2006 年 8 頁。
39）浅井春夫「これならできる幼児期の性教育」『季刊　セクシュアリティ』45 号 2010 年 20 頁、村瀬桃子「幼児の性教育ってなに？なぜやるの？」『季刊　セクシュアリティ』45 号 2010 年 123 頁。
40）太田佳代子「セクシュアル・キッズと上手にコミュニケーション !―家庭でのこんな困ったをどうする？（幼児期編・6）子どもの変身願望 !?」『季刊　セクシュアリティ』31 号 2007 年 142 － 144 頁。
41）浅井春夫「新連載 幼児期にしたい性のお話 Q&A（Q1 パンツのなかに手を入れて、性器いじりをしている子をみたら…」『季刊　セクシュアリティ』26 号 2006 年 112-113 頁。
42）浅井春夫「幼児期にしたい性のお話 Q&A　Q3 あかちゃんはどこから？（ボクはどうして生まれたの？）と突然きかれたら」『季刊　セクシュアリティ』28 号 2006 年 119 頁。
43）浅井春夫「幼児期にしたい性のお話 Q&A（Q8）女の子は " あっち行け～ !"――ジェンダーによる男女分離を考える」『季刊　セクシュアリティ』34 号 2008 年 135 頁。
44）浅井春夫「幼児期にしたい性のお話 Q&A（Q18）ボク、おチンチンが立ってきちゃった !――性器とのつきあいはじめ」『季刊　セクシュアリティ』49 号 2011 年 151-152 頁。
45）浅井春夫「幼児期にしたい性のお話 Q&A（Q7）ボク（ワタシ）を使いたがる子には、こんなことばかけを――言葉のなかのジェンダーを考える」『季刊　セクシュアリティ』33 号 2007 年 141 頁。
46）浅井春夫「幼児期にしたい性のお話 Q&A（Q21）幼児期の性教育をすすめていくうえで、大切なテーマのポイントと分岐点はどのようなものでしょうか。」『季刊　セクシュアリティ』54 号 2012 年 122 頁。
47）同上、123 頁。
48）同上、124 頁。
49）例えば、「月経の時は『どうして今夜はお母さんと一緒に入れないの？』と（子どもが : 筆者注）聞いてきます。何と説明したらよいでしょう？」というクエスチョンへのアンサーをする項目は、ある家庭の母の相談であると考えられ、状況的にはある程度母が答える必然性があると考えられるため、こうした項目については計上を除外した（佐藤明子「ここからスタート！幼児への性教育 Q&A25　月経のことをどう話す？」『季刊　セクシュアリティ』62 号 2013 年 60 頁）。
50）中野久恵「ここからスタート！幼児への性教育 Q&A25　精通のことをどう話したらよいの？」『季刊　セクシュアリティ』62 号 2013 年 61 頁）。
51）この記事で扱われているクエスチョンが、実際の母親からの投書などによる質問であるという可

能性はある。だが、そのことについてこれら 10 例においては明示されていない。また、明示されていたからといって、あえて母が答える場面を想定してアドバイスをする必要はないだろう。専門家からのアドバイス自体は、中性的表現で事足りるはずである。

52）千藤さやか「幼児期におけるいのちの教育～支援の必要な児、家庭と共に～」『季刊　セクシュアリティ』90 号 2019 年、68-76 頁。

53）同上、77 頁。

54）川端多津子「実践・小学校　ハッシー―性のグラデーションを風のように生きる」『季刊セクシュアリティ』4 号　2001 年、74-75 頁。

55）星野恵「「いのちの学習」キーワード 16」『季刊セクシュアリティ』59 号、2013 年、42 頁。

56）浅井春夫ほか「座談会「いのちの学習」を問い直す」『季刊セクシュアリティ』59 号、2013 年、16 － 17 頁。

57）『セクシュアリティ』62 号（2013 年）において浅井は、「親と離れて暮らしている」「児童養護施設で暮らしている」幼児へ、どのように声掛けをすればよいのかについてアドバイスしている。その記事において浅井は、「あなたはなんにも悪くないのよ。おとうさんやおかあさんが一緒に暮らすことができないのは大人の問題なのよ」など、特に必然性がない女ことばを多用しながらアドバイスを行っている。浅井春夫「ここからスタート！幼児への性教育 Q&A25　親と離れて暮らしている子どもへの声かけは？」『季刊　セクシュアリティ』62 号 2013 年 73 頁。